

増上寺三解脱門の建立年代に関する一考察

米 山 勇*

目 次

はじめに

1. 増上寺三解脱門について

- 1) 増上寺伽藍について
- 2) 増上寺三解脱門の建築的特質
- 3) 「三門」「山門」の呼称について
- 4) 現存する主な三門について

2. 増上寺三解脱門の建立年代をめぐって

- 1) 五間三戸二階二重門の三門と知恩院・増上寺
- 2) 建立年代に関する既往の見解
- 3) 2つの屏風絵—「江戸図屏風」(歴博本)と「江戸名所図屏風」(出光本)
- 4) 既往言説の検証と疑念の整理

おわりに

キーワード 増上寺 三解脱門 三門 山門 五間三戸二階二重門 知恩院 本寺と末寺
江戸図屏風 江戸名所図屏風

はじめに

増上寺三解脱門(口絵1および写真1)は、東京に現存する江戸時代の三門として貴重な遺構であり、国の重要文化財に指定されている。同建築は、五間三戸二階二重門の壮麗な形式をとり、江戸時代から今日まで、多くの絵画や舞台などにとりあげられてきた。一方、増上寺三解脱門の建築的特質を考察した先例はほとんどなく、建立年代についても元和7年(1621)¹⁾、元和8年(1622)²⁾の両説が混在しているのが実情である。

本論は、増上寺三解脱門の建立年代について考察し、従来の説に疑念を提起するものである。

*東京都江戸東京博物館研究員

1. 増上寺三解脱門について

1) 増上寺伽藍について

増上寺は、もと光明寺と称し、真言宗の寺院として麴町貝塚にあったとされる。増上寺としての開基は、明徳4年(1393)12月、西誉聖聡が増上寺を興隆して般舟蓮社の談法論場とし、四方の雲水を集めて輪下に講演し、自他宗の碩徳を招集し、不断法門の伽藍にしたものとする。またこの時、真言宗から浄土宗に改宗した³⁾。天正18年(1590)8月1日、家康が関東に入国したときに、増上寺の当時の住職源誉存応と師檀の契約を結んだのがきっかけとなり、徳川家の菩提寺になったと伝えられているが、家康と増上寺の結びつきについては諸説あり定かでない。

三門・本堂・経蔵・方丈からなる増上寺伽藍は、慶長11年(1606)の江戸城作事にもあづかった徳川家康直属の御大工中井正清の一派により整備された。従来、その年代は慶長10年であるとされていたが、中井正清に関する文書から、慶長16年とする見解が有力となっている。その後、元和7年～8年に三門は再建され、この時の建物が現存する増上寺三解脱門であるとされる。

2) 増上寺三解脱門の建築的特質

増上寺三解脱門は、五間三戸二階二重門であり、現存する門では最大規模の形式である。総朱漆塗装とし、屋根は入母屋造本瓦葺、東面、各部の組物は1,2階とも三手先の詰組としている(写真2)。門の左右に繫堀と山廊が取り付く。山廊は、切妻造



【写真1】 増上寺三解脱門正面



【写真3】 増上寺三解脱門2階内部背面中央



【写真2】 増上寺三解脱門1階組物

本瓦葺とする。繋扉の内側（西側）に各山廊より門の2階に達する木階を設けている。

2階内部は他所と異なり素木仕上とし、背面中央の一間に黒漆塗装の須弥壇を設け、釈迦三尊を安置している（写真3）。斎藤月岑編・長谷川雪且画『江戸名所図会』三（天保5年・1834）によれば、江戸時代には「楼上に釈迦・文殊・普賢・および十六阿羅漢等の木像を置」き、「正月・七月の十六日、二月・八月の彼岸の中日、又二月十五日・四月八日等に登楼をゆるさ」れていた。2階正面中3間と両側面の東側各1間を扉構えとし、周囲に縁を設け高欄をめぐらし、4隅に宝珠柱を立てている。

以上のような特徴は、いわゆる禅宗三門と呼ばれる門に固有のものであるが、増上寺三解脱門のように完全な形での事例は都内には他になく、日本全国でも東福寺三門、知恩院三門、善光寺三門など、数えるほどしかない。

3) 「三門」「山門」の呼称について

「三解脱門」とは、解脱を得て、涅槃に導入する三種の三昧を意味する仏語であり、万有の空を観ずる空解脱、万有の差別相のないことを観ずる無相解脱、これらの解脱に従って、さらに願求の念を離れる無願解脱の三種を指す。⁵⁾ 現存する寺院の門において「三解脱門」の呼称を用いた遺構はきわめて珍しく、国宝および国指定重要文化財建造物では、全国でも増上寺三解脱門1棟のみである。

ほとんどの場合、略称として「三門」あるいは「山門」が用いられるが、語源からすれば前者が本義であろう。「三門」の呼称を用いた主だった遺構としては、東福寺三門（1405、京都府京都市）、丈六寺三門（1467-1572、徳島県徳島市）、知恩院三門（1621、京都府京都市）、南禅寺三門（1623、京都府京都市）、長勝寺三門（1629、青森県弘前市）、善光寺三門（1750、長野県長野市）などがあげられる。

一方「山門」は、もともと寺院の正面につくられた楼門の総称として用いられた語である。楼門は二重門と同様、二層の門であるが、後者が二重屋根となるのに対し、楼門は下重に屋根がなく、縁だけの構成をとる（写真4）。増上寺三解脱門のような禅宗三門は二重門の形式をとるのが正式であるが、楼門と二重門を明確に区分するようになったのは近年のことであり、かつてはどちらも「楼門」の名で総称されていた。したがって、山門の表記も間違いではなく、『江戸名所図会』（口絵2および図1）のように増上寺の場合もむしろ、「山門」と表記するのが一般的であったと思われる。



【写真4】 楼門の例（根津神社楼門、1706年）



【図1】 『江戸名所図会』に描かれた増上寺三解脱門

4) 現存する主な三門について

増上寺三解脱門の特質を明確にするため、現存する主な三門について概要を記す。なお今回、内部の見学・撮影が可能であったものに関しては、内部写真を添付し、2階の概要も記す。

①東福寺三門（国宝） 京都府京都市 臨濟宗

東福寺三門（写真5）は、現存する三門のうち、最古最優の例とされ、禅宗三門の偉容をきわめて率直に伝える遺構である。至徳元年（1384）に再建が始まったものの工事が捗らず、応永32年（1425）に漸く完成した。

五間三戸二階二重門、入母屋造、本瓦葺、南面で、両山廊付（各切妻造、本瓦葺）とする。組物は、大仏様三手先挿肘木とし、中備は平三斗とする。

創建時の東福寺は、禅・天台・真言の3宗兼学であったが、伽藍は三門・仏殿・法堂・僧堂・衆寮・方丈・庫裏などを配した禅宗伽藍の特徴を備えていたとされる。⁶⁾

【写真5】 東福寺三門正面 臨濟宗大本山 東福寺／提供

②丈六寺三門（重文） 徳島県徳島市 曹洞宗

丈六寺の伽藍は室町時代末期に整備された。この時の遺構として唯一現存するのが三門（写真6、7）である。建立年代は不詳だが、建築の細部手法から室町時代末期と推定される。

三間三戸二階二重門、入母屋造、本瓦葺、東面。1階・2階とも組物は出組拳鼻付で、1階桁行両脇間以外を詰組とする。南面前端に階段室（写真8）を設け、両側に廻廊を接続する。階段室と廻廊の間は格子の開口部で仕切られる。2階には羅漢像を安置（現在は置かれていない）した須弥壇がある（写真9）。外周には廻廊が配され、正面に穿たれた一対の花頭窓、粽を持った柱、礎盤などが禅宗様の意



【写真6】 丈六寺三門正面



【写真7】 丈六寺三門背面



【写真8】 丈六寺三門階段室



【写真9】 丈六寺三門2階内部須弥壇

匠的特徴をよく示している。

③知恩院三門（国宝） 京都府京都市 浄土宗

16世紀半ばに浄土宗総本寺としての地位を確立した知恩院は、文禄年間末に、徳川家康から京都菩提所に仰付られた。慶長8年（1603）2月に大伽藍の造営が家康から仰せ出され、一挙に広大な寺地を占めることとなった。元和5年（1619）9月には徳川秀忠によって、三門（写真10）・経蔵の造営が始まり、同7年（1621）の秋にはほぼ完成に近づいたものとみられている。⁷⁾

五間三戸二階二重門、入母屋造、本瓦葺、西面で、両山廊付（各切妻造、本瓦葺）とする。組物は1階を二手先詰組、実肘木絵様繰形付、三段肘木木鼻付とし、2階を三手先詰組、実肘木絵様繰形付、四段肘木木鼻付としている。また、外部木口を胡粉塗とし、鮮やかな色彩効果を生んでいる（写真11）。

後述するように、知恩院三門は増上寺三解脱門と同様、浄土宗寺院の門でありながら禅宗三門の形式を踏襲した事例であり、両者の間には多くの共通する手法を見出すことができる。両寺が本寺と末寺の関係にあることを考えるならば、増上寺三解脱門の造営に際し、知恩院三門を参考にした可能性を指摘



【写真10】 知恩院三門正面



【写真11】 知恩院三門1階組物

したいところであるが、両者の建立年代を考慮すると、影響関係を指摘するのは困難である。

④南禅寺三門（重文） 京都府京都市 臨濟宗

瑞龍山太平興国南禅禅寺と正称する当寺は、臨濟宗南禅寺派の大本山であり、今日見ることができる伽藍は慶長10年（1605）、崇伝の入寺後に復興されたものである。歌舞伎の「楼門五三桐」でも広く知られる三門（写真12・13）は、慶長11年の法堂建立、同16年の方丈移建について、寛永5年（1628）に落慶した。



【写真12】 南禅寺三門正面



【写真13】 南禅寺三門背側面

五間三戸二階二重門、入母屋造、本瓦葺、西面で、両山廊（各切妻造、本瓦葺、写真14）付とする。組物は1階を二手先詰組、実肘木絵様繰形付、三段肘木木鼻付とし、2階を三手先詰組、実肘木絵様繰形付、四段肘木木鼻付としている。2階内部は総極彩色塗とし、漆塗の須弥壇を据える（写真15）。

同門の建立にあたって崇伝は、施主の藤堂高虎及び総奉行である吉田貞右衛門と緊密に連絡を取りながら、相国寺ならびに知恩院の三門を調査・参考にするよう申し付けたとされているが、そのことを示すように構造形式、組物の構成ともに知恩院三門に酷似した建築となっている。



【写真14】 南禅寺三門山廊



【写真15】 南禅寺三門2階内部

⑤長勝寺三門（重文） 青森県弘前市 曹洞宗

長勝寺は曹洞宗に属し、現在は三門・本堂・御影堂・蒼竜窟及び藩家の廟5棟等を残し、弘前市屈指

の大寺院である。三門（写真16）は津軽四代信政の寛永6年（1629）に造立されたもので、文化年間の大修理で前面両脇間に花頭窓を設け、金剛力士を安置するなど、かなりの変更が行われた。

三間一戸楼門、入母屋造、栩葺、東面。正面のみに花頭窓を配する手法は同じく曹洞宗の丈六寺三門と共通しており、禅宗様の華やかな意匠によって正面性を強調する曹洞宗三門の特質を指摘できよう。腰組及び上層軒廻りに三手先詰組の斗拱を用い（写真17）、腰に縁を廻し、逆蓮頭親柱付の高欄を設ける。

両側面に急勾配の階段を取り付け2階と接続する（写真18）。2階は正面中央に棧唐戸を吊り、左右及び両側前面の間に板引戸を嵌め込む。内部は中央2本の円柱を中仕切とし、3間に引違格子戸を建込んで前後に分ち、内陣・外陣とし（写真19）、内陣の後壁に接して中央壇・左右壇を設け、釈迦像1体と羅漢像8体を安置する。



【写真16】 長勝寺三門正面



【写真17】 長勝寺三門1階組物



【写真18】 長勝寺三門階段



【写真19】 長勝寺三門2階内部

⑥善光寺三門（重文） 長野県長野市

善光寺の創立は古く、秦巨勢太夫が阿弥陀像を信濃に移し、皇極天皇元年（642）または天智天皇3年（664）に寺を創設したという⁸⁾。現在の三門（写真20）は本堂の寛保2年（1743）修理に引き続き、延享元年（1744）造営がはじまり、寛延2年（1749）6月24日上棟、同3年4月8日に入仏式が執り行われた。工事費は3,788両であり、すべて出開帳による収益により費やされたという⁹⁾。

五間三戸二階二重門、入母屋造、栩葺、南面で、山廊は持たない。屋根は当初栩葺であったものを大



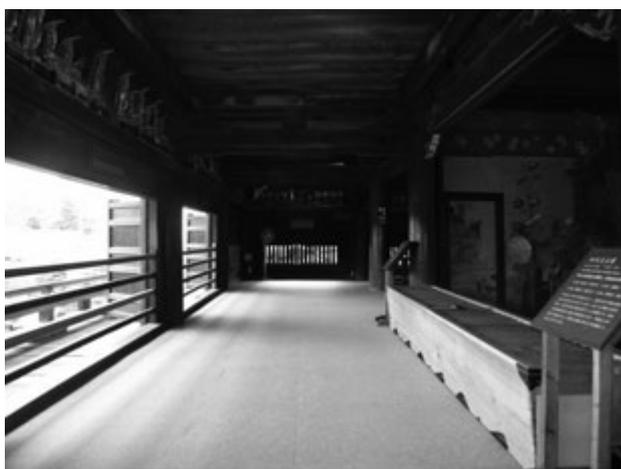
【写真20】 善光寺三門正面



【写真21】 善光寺三門2階組物

正10年（1921）、檜皮葺に改めたが、平成20年（2008）、ふたたび栩葺に葺き替えた。組物は1、2階とも和様三手先斗拱とし、肘木の手先方向に拳鼻を付ける。大斗・枳肘木を納め、側廻りの2・3段目は通肘木とする。2階のみ尾垂木を用い、2階縁下腰組は、和様平三斗組斗拱とし、肘木の手先方向に拳鼻を付ける（写真21）。

1階桁行中央3間通りを通路とし、両端各1間を階段室として2階へ登る階段を構える。2階は中央間背面寄りに内陣を設ける（写真22）。外部に縁を廻し、親柱付高欄を設ける。なお、善光寺三門の2階へは昭和40年代に発生した松代群発地震まで、彼岸など日を限って一般信徒の登楼が許されていた。2階内部の壁板に残る無数の落書きの年号から2階への登楼は江戸時代から行われていたことがわかる（写真23）¹⁰⁾。



【写真22】 善光寺三門2階内部



【写真23】 善光寺三門2階柱および壁の落書き

2. 増上寺三解脱門の建立年代をめぐって

1) 五間三戸二階二重門の三門と知恩院・増上寺

前節では、現存する主な三門（国宝・国指定重要文化財）について概略を記した。それらのうち、五間三戸二階二重門の規模を持つものは、増上寺三解脱門以外に東福寺、大徳寺、知恩院、南禅寺、善光寺の5棟となる。さらに「山門」を含めた現存する五間三戸二階二重門（国宝・国指定重要文化財）を、表1に示し比較してみる。

【表1】 現存する五間三戸二階二重門の三門（山門）（国宝及び国指定重要文化財）

建造物名	建立年代	宗派	所在地 (都道府県)	山廊	組物（概略）
東福寺三門	応永12年（1405）	臨済宗	京都	有	大仏様三手先挿肘木
大徳寺山門	天正17年（1589）	臨済宗	京都	有	禪宗様三手先詰組
妙心寺山門	慶長4年（1599）	臨済宗	京都	有	禪宗様三手先詰組
知恩院三門	元和7年（1621）	浄土宗	京都	有	禪宗様三手先詰組
増上寺三解脱門	元和8年（1622）	浄土宗	東京	有	禪宗様三手先詰組
南禅寺三門	寛永5年（1628）	臨済宗	京都	有	禪宗様三手先詰組
善光寺三門	寛延3年（1750）	無宗派	長野	無	和様三手先

※三（山）門ではないが、形式的に五間三戸二階二重門の形式を備えたものに、仁和寺二王門、金剛峯寺大門（どちらも真言宗）がある。

表1からも明らかなように、五間三戸二階二重門の三門（山門）は、知恩院、増上寺、善光寺を除くと、いずれも臨済宗寺院の堂宇である。五間三戸二階二重門の三門は、東福寺以来、とくに臨済宗寺院において継承・発展した形式といえることができる。

一方、無宗派の善光寺はともかくとして、知恩院の三門が臨済宗のそれを踏襲した五間三戸二階二重門の形式を採用した背景としては、徳川家・京都菩提寺の門として、同じ京都に建つ他寺院の堂々たる三門にひけをとらないよう、宗派を超えた造営が命じられたのだと考えられる。前述したように、知恩院の7年後に竣工した南禅寺三門において、相国寺と並んで知恩院の三門が参考にされた事実は、当時最先端の技術を投じて建設されたであろう知恩院三門が、その後の規範となり得る建築として、臨済宗寺院にまで影響を及ぼしたことを語っていよう。同様のことが増上寺三解脱門についても考えられる。徳川家菩提寺の三門を再建するにあたり、豪壮かつきらびやかな五間三戸二階二重門が形式として選ばれたとすれば、浄土宗寺院における先例であり、増上寺とは本寺・末寺の関係にある知恩院の三門が参考にされたと考えるのは自然であろう。

そこで問題となるのが、両門の建立年代である。知恩院三門は元和7年（1621）の建立、増上寺三解脱門が同7年ないし8年の建立であるとするのが今日の共通見解であり、工事期間等を考えると、知恩院三門を参考に増上寺三解脱門が建設されたとは考えにくいのが実情である。

2) 建立年代に関する既往の見解

増上寺三解脱門について建築史的に論じた文献は、甚だ少ない。そうしたなか、建立年代について言及したものに、内藤昌著『江戸図屏風 別巻 江戸の都市と建築』と『重要文化財増上寺三解脱門及び南北繫塚南北山廊保存修理報告書』がある。両者の刊行はそれぞれ昭和47年（1972）12月と同49年3月だが、保存修理工事自体は昭和46年8月から行われている上、互いの引用が見られないため、影響関係は不明である。

『江戸図屏風 別巻 江戸の都市と建築』は、広義の江戸図屏風に描かれた建造物を素材としながら、

江戸を都市史的・建築史的に論じた労作である。ここで内藤氏が手がかりとしているのは、『東武実録』の以下の記述である。

元和七年八月三日 東國台風吹テ増上寺ノ山門破レ倒ル

是日 (元和八年十月十五日) 増上寺ノ山門御再興成テ供養執行アリ

これを受け内藤氏は、「これが現存する朱塗りの本瓦葺入母屋造五間三戸二階二重門である」と断定している。『徳川実紀』も『東武実録』を引用し、「(八月) 三日大風。増上寺門を吹倒す」「(十月) 十五日 増上寺山門再興にて供養行はる」と記しており、元和8年10月に増上寺三解脱門が再建された可能性は低くない。しかし、それが「現存する朱塗りの本瓦葺入母屋造五間三戸二階二重門である」と断言する根拠はどこにあるのだろうか。

一方の『重要文化財増上寺三解脱門及び南北繫塀南北山廊保存修理報告書』は、増上寺三解脱門について論じる際に必ず参照される第一文献である。これによれば、昭和46年4月8日の解体作業中、1階通路上の西側台輪下板壁に打ちつけられた檜板の棟板が発見され、下記の墨書が確認された。

特別保護建造物慶長十年建立寛永元年改造元禄九年
修覆爾来数度修繕を加え、近く明治四十四年大修繕を
施こし大正四年三月二十六日特別保護建造物に指定せ
らる

4月26日の解体作業ではさらに、2階頭貫より「元和七年西三月吉日」の墨書が発見された(写真24)。これに基づき、報告書は下記のように論じている。

三解脱門も現在まで慶長10年建立と信じられていたが、今回の自費工事による解体(昭和46)で、2階頭貫上端に「元和七年西三月吉日」(1622年)の墨書があったところより見ると、漆塗装に依る日時等を考慮して元和八年末(1623年)と建立時を改めるのが至当と考えられる

つまり、昭和46年に行われた解体修理工事までは、現在の三解脱門が慶長10年¹¹⁾、中井正清によって整備された増上寺伽藍以来の遺構と考えられていたが、修理工事で発見さ



【写真24】 解体修理で発見された2階頭貫の墨書『重要文化財増上寺三解脱門及び南北繫塀南北山廊保存修理報告書』(増上寺復興事務局、1974年)

れた墨書により、その後、元和7年～8年にかけて再建されたのが現在の三解脱門であるという見解であろう。しかし、ここで提示される元和8年建立という年代が、基本的に解体修理時に発見された一墨書のみ依存しているのは問題であろう。そもそも、別の日に発見された棟板に元和年間の記載がないのはなぜであろうか。そのことについてまったく言及していないのは、まことに不完全といわざるを得ない。

さらにいえば、「元和8年末」という時期も不自然である。元和8年は徳川家康の七回忌にあたる年だが、家康の七回忌祭儀は同年4月17日、日光東照宮において、公家衆・諸門跡・諸大名参集のうちにとり行われた。徳川家の菩提寺において、五間三戸二階二重門という前例のない規模と形式をもつ華麗な三門を建設するのであれば、七回忌に間に合うよう工事が行われるのが自然ではないか。

内藤氏は文献史料の裏付けをもって、元和8年に増上寺山（三解脱）門が建設された「事実」を明らかにしている。しかしながら、その建物が現存する三解脱門と同一である証明にはなっていない。保存修理報告書は、建築の修理工事で発見された墨書に基づき、独自の考察を加えながら、やはり元和8年説を導き出している。だが、墨書が書かれた頭貫材が旧建築から転用された可能性がないとは言い切れないし、そもそも「墨書」を有力な史料とするなら、棟札との矛盾をどう考えるのか。

文献史料、墨書による考証結果からは、元和8年当時の増上寺三解脱門がどのような「すがた」であったのかを導くことは不可能なのである。そこで次節では、考証の手がかりを絵画史料に求めてみたい。

3) 2つの屏風絵—「江戸図屏風」（歴博本）と「江戸名所図屏風」（出光本）

黒田日出男氏も指摘するように、明暦の大火以前の江戸に関する史料は少ないが、「江戸図屏風」と総称される都市図屏風は、初期の江戸のすがたを知る上で、きわめて重要な史料である¹²⁾。それらの中でもとりわけ重要な屏風絵が、国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸図屏風」（口絵3、六曲一双。以下、歴博本）、出光美術館所蔵の「江戸名所図屏風」（口絵4、八曲一双。以下、出光本）であろう。

制作年代は、歴博本が寛永11年（1634）～12年¹³⁾、出光本が寛永8年（1631）～慶安4年（1651）¹⁴⁾とされている。どちらも増上寺伽藍の様子をはっきりと描いており、本論において有効な史料となり得る。

景観年代については、内藤昌氏の前掲著『江戸図屏風 別巻 江戸の都市と建築』に詳しい論考がなされている。それによれば、歴博本が「上限は、第二次安国殿入仏あった寛永10年12月17日、下限は翌11年2月の駿河大納言邸上野忍岡移築」であり、出光本が「寛永10年1月24日までは竣工したと考えられる増上寺圓山山上の五重塔で定まる。下限は、寛永9年5月中橋南の歌舞伎芝居の吉原西欄宜町移転が重要な意味をもっていると思われるが、同8年4月2日炎上の浅草寺堂宇で規される。僅かではあるが下限が上限をさかのぼり、復原表現のケースに相当」する。

このように、歴博本と出光本はほぼ同時代の江戸を描いたものといって差し支えない。ここで、両者に描かれた三門のすがたと現存する増上寺三解脱門を比較し、表2に示してみよう。

【表2】 現存する増上寺三解脱門と「江戸図屏風」(歴博本)、「江戸名所図屏風」(出光本)における描写の比較

	現存の増上寺三解脱門	歴博本	出光本
構造形式	五間三戸二階二重門	三間一戸二階二重門	三間一戸二階二重門
袖塀	有り	無し(門と山廊が直結)	無し(門と山廊が直結)
山廊の規模	三間	二間	二間
花頭窓	有り	無し	無し
2階への階段	外部	山廊内	山廊内
組物	詰組	柱上のみ	不明
朱塗	有り	無し	無し

表2から明らかなように、両屏風に描かれた三門の姿は、現存する三解脱門と大きく異なる。いわゆる禅宗三門の特徴である五間三戸の規模、花頭窓、詰組といった要素は両屏風の描写には一切見られず、浄土宗寺院の門として適当な和様の二重門となっている。また、門と山廊をつなぐ袖塀はなく、門の山廊が壁を共有して直結し、2階への階段も山廊内部に収められている。

興味深いのは、現存建物に見られる朱塗がほどこされていない点である。両屏風とも、寛永寺、浅草寺、上野東照宮、湯島天神、神田明神、愛宕社、徳川家廟五重塔には、ことごとく朱塗が表現されているから、増上寺伽藍の建物に朱塗がないのは、描画上の省略ではない。

以上のことから考えられるのは、歴博本・出光本に描かれた増上寺三門は、現存する増上寺三解脱門とは別の建物であるということだ。

寛永期の江戸を描いた絵画史料に現存する建物が描かれていないとすれば、現存の増上寺三解脱門の建立



【写真25】 増上寺三解脱門 2階への階段



【写真26】 歴博本に描かれた増上寺三門



【写真27】 出光本に描かれた増上寺三門

年代が元和期に遡ることはあり得ない。『東武実録』に記された「山門の再建」は現存する三解脱門ではなく、歴博本・出光本に描かれた増上寺三門、すなわち現在の三解脱門の前身建物についての記述であったと考えられるのである。

4) 既往言説の検証と疑念の整理

「江戸図屏風」（歴博本）、「江戸名所図屏風」（出光本）に描かれた増上寺三門のすがたを現存する三解脱門と比較して論じた例はきわめて少ないが、たとえば波多野純氏は、出光本について次のように述べている。

増上寺は、浄土宗の盛んな三河出身の家康の帰依をえ、江戸城内から慶長3（1598）年芝に移され、堂宇が整備された。今も元和8（1622）年に再建された壮大な三解脱門が遺る。本屏風の三解脱門は、間口三間に描かれるが、実際には五間あり、うち三間が出入口となっている。しかし二階二重門の形式は一致しており、描画上の省略であろう。¹⁵⁾

また、濱島正士氏は両本を比較しながら、次のように論じている。

増上寺は、歴博本では徳川家の各霊廟を詳細に描き、出光本では霊廟関係は五重塔だけしか描いていないが、本堂・山門・鐘楼については両者の描き方はよく似ている……山門は左右に山廊をもった三間一戸の二重門として描かれており、元和7年（1621）建立の現三門と比べると、規模は異なるものの形式はよく似ている。歴博本は徳川家霊廟についてはかなり正確に当時の状況を写したものの、増上寺伽藍にはさほど力を注がず類本を参考にして描いたものではなかろうか。その類本は出光本であったのかもしれない。¹⁶⁾

両者とも、絵画史料における写実性への疑念を前提にした「省略説」である。朱塗がほどこされていない点が省略でないことについてはすでに述べたが、本論では、それ以外の点でも省略説を否定したい。

まず、歴博本の性格を考えるならば、水藤真氏が内藤考証に依拠しながら述べるように「生れながらの将軍家光が父秀忠の隠居をうけて将軍となったその日から、名実ともに将軍となったその日、即ち寛永十一年正月廿五日台徳院霊廟を参るその日までの事績が描かれている」ものであり、¹⁷⁾「三代将軍徳川家光の事績が描かれていることについては、諸説一致している」¹⁸⁾。また、樋口州男氏は下記のように述べている。

家光もしくは幕府との関係に留意しつつ描かれた寺社を見ていくならば、まず最初に注目されるのは、将軍家菩提寺の増上寺であろう。

……つまり父の霊廟に参詣中の家光一行が描かれているのであり、より具体的にこれを寛永11年正月24日の秀忠三回忌の場面で、家光が名実共に天下を掌握したことを内外に示す出来事であったとす

る推定もなされている¹⁹⁾。

このように、増上寺は歴博本においてもっとも重要な描画対象であり、その三門が五間三戸二階二重門というそれまでの江戸に存在しなかった壮麗な建築として、徳川幕府の威信を示すものであったとするならば、「家光の事績」をテーマにした同本においてそれを省略する理由は考えられない。

さらに、黒田日出男氏が指摘するように「両本の江戸を描く姿勢や建物の描き方には大きな違いがある」ことを重視しなければならない。手法的に大きく異なる両者において、増上寺三門に限り、「まったく同じ省略の仕方をした」と考えるのはあまりにも不自然である。2階への階段を山廊内におさめ、小窓越しに見せる描写に至っては、省略どころではなくむしろ緻密な表現とすらいえるだろう。なお、両本において同一の描かれ方をされているのは三門のみであり、本堂をはじめとする他の堂宇は少なからず異なったすがたで描かれている。したがって、濱島氏の「類本」説も否定される。

以上、述べてきた増上寺三解脱門の建立年代に関する疑念を整理すると、以下のとおりである。

- ① 現存する増上寺三解脱門の建立年代は元和7年ないし8年とされる。
- ② 「江戸図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵)、「江戸名所図屏風」(出光美術館蔵)に描かれた増上寺三門のすがたは、現存する同門と異なっている。
- ③ 両屏風に描かれた三門のすがたは同一といってよい。
- ④ 両屏風の景観年代は、寛永期である。
- ⑤ したがって、屏風に描かれた三門は現存する三解脱門とは異なる(前身)建物と考えられる。
- ⑥ 増上寺三解脱門の建立年代は元和期ではない可能性が高い。

おわりに

これまで増上寺三解脱門は、元和7～8年の建立とされてきたが、実際にはそれより下る建築である可能性が高い。具体的な建立年がいつであったかについては本論の目的を超越した大きな問題であり、ここで言及すべきものではない。いずれにせよ、当該建造物については、美術史・建築史の双方、そして文献史からもさらなる考究を蓄積する必要があるのではないか。

【註】

- 1) たとえば、文化庁「国指定文化財等データベース」。
- 2) たとえば、内藤昌『江戸図屏風 別巻 江戸の都市と建築』(毎日新聞社、1972年)、『重要文化財時増上寺三解脱門及び南北繫堀南北山廊保存修理報告書』増上寺復興事務局、1974年。
- 3) 『三縁山志』
- 4) 『大本山増上寺史 本文編』(大本山増上寺、1999年)、47頁。
- 5) 『国語大辞典』(小学館、1981年)、1082頁。
- 6) 中川武編『日本建築みどころ事典』(東京堂出版、1990年)、126頁。
- 7) 京都府教育庁指導部文化財保護課編『重要文化財知恩院三門修理工事報告書』(1992年)、2頁。

- 8) 前掲、中川『日本建築みどころ事典』、38頁。
 - 9) 文化財建造物保存技術協会編著『重要文化財善光寺三門保存修理工事報告書（本文編）』（善光寺、2008年）、13頁。
 - 10) 前掲書『重要文化財善光寺三門保存修理工事報告書（本文編）』、194頁
 - 11) なお、慶長10年とされた伽藍整備が、実際は同16年に下るという見解が今日有効であることは、冒頭で述べたとおりである。
 - 12) 黒田日出男『江戸図屏風の謎を解く』（角川学芸出版、2010年）、14頁
 - 13) 黒田日出男『王の身体 王の肖像』（平凡社、1993年）、92-94頁
 - 14) 小木新造・竹内誠編著『江戸名所図屏風の世界』（岩波書店、1992年）、89頁
 - 15) 前掲、小木・竹内『江戸名所図屏風の世界』、76-78頁
 - 16) 国立歴史民俗博物館編『描かれた江戸』（1991年）、71-72頁
 - 17) 水藤真『『江戸図屏風』製作の周辺—その作者・製作年代・製作の意図などの模索—』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集、1991年）、35頁
 - 18) 水藤真・加藤貴編著『江戸図屏風を読む』（東京堂出版、2000年）、3頁
 - 19) 前掲、水藤・加藤『江戸図屏風を読む』、24-25頁
- ※本文図版のうち、特に明記していないものは米山勇が撮影した。